

# 親 鸞 思 想 の 解 明

日 時： 9月休講

(会 場) 第125回 10月15日(火) 18:30~20:30 東京国際フォーラムG棟502

第126回 11月 5日(火) 18:30~20:30 東京国際フォーラムG棟502

※ご参加の予約は不要です。(受付18:00~)

なお、満席の場合には先着順となりますのでご了承ください。(定員：80名)

※会場案内図は裏面をご覧ください。

講 題： 浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

講 師： 親鸞仏教センター所長 本多弘之

テキスト： 『真宗聖典』〈ご希望の方は、東本願寺出版(下記)までご注文ください。〉

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

●インターネットでの書籍のお求めは、

URL <http://books.higashihonganji.or.jp>

TOMOぶっく

検索 

聴講料： 無 料

※ 講義(問題提起)後、ご参加の方々との質疑応答の時間を設けております。  
お気軽にご参加ください。

## 講座開設の趣旨

現代文明の溢れる人間社会を<sup>あふ</sup>生きているものにとって、入手できる情報の範囲はずいぶん広がってはいる。しかし、生まれてから死ぬまで、それぞれの人が与えられる自己の状況に、自分自身が納得し、<sup>うなず</sup>こころから領けるかというなら、決してそうではない。一般的な条件と、ことさらに自分に起こってくる事件や事実との間には、どう考えても不条理だとしか考えられない落差が出てくるからである。その落差を、<sup>しゆくごういんねん</sup>仏教的表現では「宿業因縁」と教えるのであるが、この宿業因縁を自己に必然の事実であると引き受けることは容易ではない。

その落差の条件を<sup>ひゆ</sup>比喩的に表現するなら、「届かない<sup>かなた</sup>彼方」とか「見えざる背景」とか、あるいは「自己に<sup>ごうほう</sup>負荷されている祖先の業報」というのであろう。これは、<sup>ふんべつ</sup>理知分別の計数には決して翻訳できない人間の条件なのである。しかもそれが、現実のわれらの生存を厳粛に規定している。この宿業因縁の圧迫から解放しようとする要求が、「浄土を求めさせる要求」の深みにあるのではなかろうか。

本多弘之

主 催： 親鸞仏教センター (真宗大谷派)

〒113-0034 東京都文京区湯島2丁目19-11

TEL 03-3814-4900 FAX 03-3814-4901

E-mail [shinran-bc@higashihonganji.or.jp](mailto:shinran-bc@higashihonganji.or.jp)

URL <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://www.facebook.com/shinran.bc>

親鸞仏教センター

検索 

## 生死と涅槃との分水嶺に立つ

行にたまたまわった信心は無上功德だと。無上功德の内実とは、今、迷いの人生がここで超えられるのだと。名号に遇って闇が破られて願が満たされる、こう信ずる。そういうことにおいて成り立つものが真仏弟子である。そのご自釈で、「この信・行に由って、必ず大涅槃を超証すべきがゆえに、「真仏弟子」と曰う」（『聖典』245頁）と。大涅槃を超証する。この超証は横超です。横超の超越をいただくことが真仏弟子なのだ。

そのことにおいて、「それ至心ありて安楽国に生まれんと願ずれば、智慧明らかに達し、功德殊勝を得べし」（同上）と、先ほどの『無量寿経』の言葉を引用される。願生すればそういう功德が起こるのだと。この願生は、先ほどの本願成就文の「願生彼国 即得往生 住不退転」の願生です。願生は即ち得生、「願生彼国 即得往生」という事実に出遇う。出遇わしめる原理が至心回向です。至心回向を受けるなら、「願生得生 住不退転」。住不退転という利益が願生者に与えられる。この至心回向は如来のお心だと。如来の至心が「南無阿彌陀仏」として呼びかけてくださっているのだと。「我が名を称えよ、我が名を念ぜよ」と。そういうふうにして我々を包んで止まない大悲の願心に触れるという事実、それが信の一念に立つということだと。願生すれば得生する。願生の位と得生の位は時が別ではありませんから、それが一念の内容です。それは「前念命終 後念即生」、前の念に死んで後の念に生まれかわる。常に今、念々に南無阿彌陀仏と共に流転の命が本願の命によみがえる。そういう事実を我々は生きていく。信の一念に過去と未来を包む。そういうように本願と値遇する。

信の一念をいただくということは、本願力に出遇うことにおいて横超断四流、つまり迷いの命が断たれるような、生死と涅槃との分水嶺に立つことができるのだと。自分で立つわけではない。横超の本願力によって分水嶺に立つことが成り立つと云うのです。

（『親鸞仏教センター通信』第69号〈第117回「親鸞思想の解明」〉より）

会場案内図



●JR 有楽町線 有楽町駅より徒歩1分

●東京メトロ有楽町線 有楽町駅と地下1階コンコースにて連絡

●東京メトロ有楽町線 有楽町駅と地下1階コンコースにて連絡